

第三者意見



(株)日本政策投資銀行
設備投資研究所
エグゼクティブフェロー
竹ヶ原 啓介氏

サステナビリティレポート2022は、「モビリティの可能性を追求し、活力ある社会をつくります」というビジョンの実現に向けた、貴社の取り組みを網羅的に開示する役割を担っています。企業理念や戦略、重要なトピックスを紹介する前半部分で大きな方向性を示し、マテリアリティの中長期ビジョンに則して前年度の活動実績を報告する後半部分で具体例を見せる構成からは、幅広い取り組みを読者に体系的に理解してもらいたいという編集意図が伝わってきます。

昨年度のレポートでは、前半部分を中心に、①「三菱自動車らしさ」へのフォーカス、②環境ビジョン2050の導入による長期の時間軸の強化、③ダイナミックマテリアリティ志向、という比較的大きな変化がありました。今年度は、この新たな要素を充実させることに力点が置かれているようです。それを端的に示すのが、トップコミットメントです。サブ

ライチェーン全体でのカーボンニュートラル、企業価値向上につながる人材育成、人権への取り組み強化、ガバナンスの強化という章立てを経て、最後に「『三菱自動車らしさ』の一層の追求と価値提供」で締めることで、トップコミットメントは、新たな方向性の充実に関するエッセンスを一覧化する役割も担っています。

具体的に内容を見ていくと、まず目に留まるのが「環境ビジョン2050」の改定です。昨年版では、ネットゼロへの移行リスクに対する社会の強靭性を高めることへの貢献という、やや間接的な表現が用いられていましたが、今回、企業として2050年カーボンニュートラルを実現するというコミットメントが明記されました。その武器となるのが電動車であり、その価値を高めるために、ビジネスパートナーとの連携、IoT技術の活用、再生可能エネルギーの普及などを複層的に進める戦略は、「三菱自動車らしさ」の追求を具体的に表現しており、読者の理解を深めてくれます。また、これから大きな課題になる使用済みバッテリーを活用してVPPを構築し、地域のレジリエンス強化に取り組もうとする姿勢も、コア技術に基づき、気候変動、サーキュラーエコノミー、地域レジリエンスを同時追及するものであり、貴社らしさを体現しているように感じました。こうした取り組みを資本市場に伝えるツールであるTCFD提言への対応がアップデートされたのも今号のハイライトの一つです。3つのシナリオに則してリスク・機会が分析され、環境ビジョン2050改定に向けた社内での議論の一端を垣間見せてくれており、読みごたえがありました。

社会性の側面でも、幾つか重要な進展がありました。まず、行動指針である「MMC WAY」の見直しが挙げられます。トップメッセージにおいて示された、多様な人材の活躍が企業価値向上の鍵であるとの認識の下、求められる人材像が再設定されたことは、経営層からの重要なメッセージです。併せて、人権デュー・ディリジェンスの着手や健康経営に関する新指標の追加など、リスク管理面での対応も着実に強化されていることがわかります。

2022年度から、役員の中長期業績連動報酬の指標に、CO₂排出量と従業員エンゲージメントを追加し、環境、社会両面での取り組みの進展をガバナンスと連動させたことも、サステナビリティ対応を重要な経営課題に位置付けている姿勢を端的に示しています。

本レポートは、サステナビリティに関する活動を体系的かつ網羅的に提示する機能において、一段と深みを増したと考えます。「三菱自動車らしさ」とそれを体現する具体的な取り組みをコンテンツとして網羅した今、次に期待されるのは、戦略部分をより充実させ、価値創造の観点からストーリー性を強化することです。トップメッセージ、マテリアリティ、中長期戦略に加え、今回、MMC WAYの改定を通じて人的資本の視座が強化されるなど、主要なパーツは揃っています。これを組み合わせた価値創造プロセス提示への期待が高まります。並行して進化を続けている統合報告との役割分担・連携も含めて、更なる充実を楽しみにしております。